

## 伝吞海像

京都 長楽寺蔵

木造彩色・玉眼嵌入  
像高八四・〇糎  
〔図版十〕

京都東山区円山の長楽寺本堂に安置されている時宗僧侶坐像五軀のうちの一軀で、同寺にはほかに、等身よりやや小さい一遍上人の立像一軀と等身大の倚像一軀とを伝えている。いずれも明治四十年に七条金光寺から本寺に移安されたものである。以上の肖像彫刻のうち際立った作風を示すのは寺伝に吞海と名づける坐像で、風貌形姿の凛として、いかにも時宗僧としての厳しい宗教生活の星霜を偲ばせるものがあり、鋭い眼光にはまだ老衰の相には程遠い活力を感じさせる。

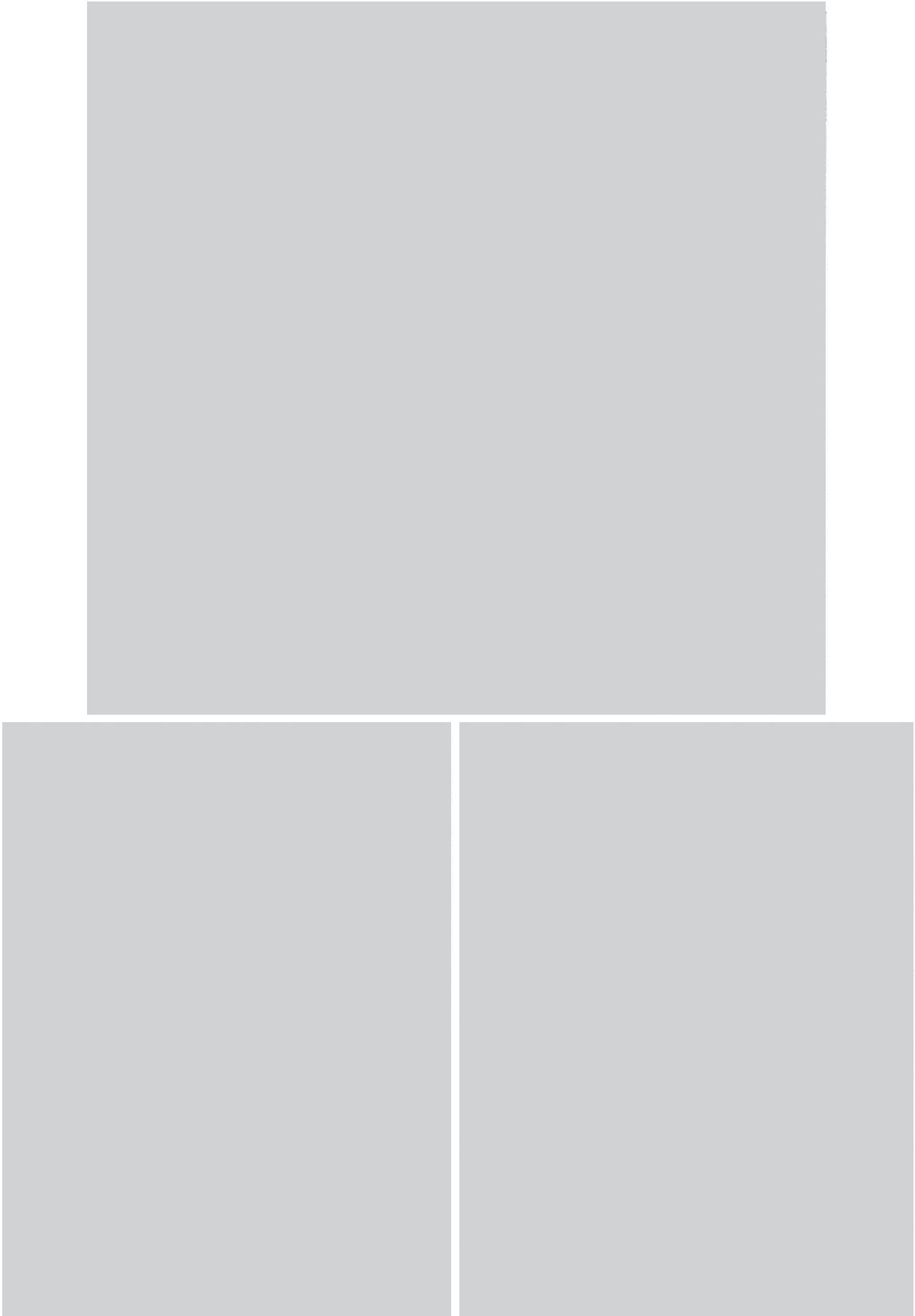
像は胸前で合掌し、厚手の袈裟・衣を身にまとうて端坐する姿で、胸腹部および足膝部の奥行は、やや深きに過ぎる感さえあるほど、像主の体の厚味を感じさせる造りである。面貌の描写は詳細をきわめ、眉間の立て皺、眼窩の落ちくぼみと二重瞼、やや小さめの鼻と口の結び方など、個性的な風貌はあますところなく忠実に写されている感がある。また頭骸の形も、前頭部は尖り気味にわずかにもりあがり、頭頂部にはわずかな段が、後頭部にも微妙な凹凸がみられる。像主のそれを克明に追わない限り、このような迫真の描写は不可能ではないか、すなわち少くとも顔貌については、何らかの事由で生前の像主をモデルとして造られたのではないかとの感を深

くする。

このように卓れた顔貌の表現に対して、多くの肖像彫刻がそうであるように、衣の表現は写実に徹したのではなく、かなり観念的要素が感じられる。衣文の設定はやや繁褥で、滑り流れる感じが強く、顔貌の深い内面性とマッチするものとはいえない。

この重厚な印象をもつ時宗僧の肖像について、寺伝は第四代吞海上人の像としている。吞海（二六五〜三三七）は、文永二年相模高座郡俣野郷に生れ、はじめ相模当麻寺無量光寺真教の門に投じて時宗を学び、京都七条の金光寺に住んだが、元応元年（一三一九）智得の譲を受けて遊行上人第四世の法位を承けるに及んで、諸国に遊行し、各地に道場を創設した。正中二年（一三三五）相模に到り、現在時宗の総本山となっている清浄光寺（俗称遊行寺）を、将軍守邦親王並びに執権北条高時に請うて建立、のち寺職を安国に譲り、嘉暦二年（一三三七）二月十八日、寿六十三で同寺に寂したという。

明治十年代から二十年代にかけて記された『宝物什器取調帳』（京都府保管）の抜萃とみられる『寺院什器簿』（京都国立博物館蔵・明治三十年頃筆写）の下京区材木町金光寺の条には、「元祖一遍木像一鉢／二祖真教木像厨子入一鉢／四祖吞海木像一鉢／遊行代々木像八鉢」とあり、四祖吞海については元祖、二祖については他とはやや区別して特別に扱っている。明治初年の金光寺における伝承を示すもので、長楽寺においてもこの伝承はそのまま受け継がれている。四祖吞海が金光寺において特別な扱いを受けるのにはそれだけの理由がある。『遊行二代真教上人書状』<sup>註1</sup>（『遊行歴代他阿弥書状』長楽寺蔵）の奥書によると、当寺の開山は四代上人で正安三年（一三〇二）の建立、十九年の御住とある。この奥書よりのちと思われる『山州



伝 吞 海 坐 像 長 樂 寺

名跡志』(元禄十五年・一七〇二)および『山城名跡巡行志』(宝暦四年・一七五四)もともに金光寺の開山を四世他阿上人すなわち吞海としている。したがって金光寺が開山像として吞海木像を特別に記すことは当然のことであり、現在長楽寺の藏となった旧金光寺伝来の時宗僧の肖像のうち、追慕的な初祖・二祖の像を除いて、作風上製作年代がもっとも古いと考えられる本像を開山の像の当てることはごく自然の考え方といえよう。

本像の面貌からは六十三歳という年齢は想像できない。一般に製作年代のわからない僧侶肖像は、歿後間もない頃とされることが多いが、僧侶肖像の本質には、追慕または業績の顕彰といった動機とは別に、像主自身がおのれの真像を後世に遺そうという切実な宗教的希求があり、それは偽りのない真容を伝えるものでなくてはならなかった。したがって寿像の造られたことが多かったのである。<sup>註2</sup>すでに述べたように、面貌の克明な描写には寿像と考えたいほどの迫真性がある。俗人とは異なる特異な生活を送った僧侶の場合、老齡にして意外に若々しい場合もあるから一概にはいえないが、本像を吞海の肖像と考えた場合、次のような仮説は成り立たないであろうか。みづからが創建し、二十年近くも住した金光寺を吞海が去る時期、すなわち、智得の譲を受けて遊行四世となり諸国遊行に旅立つ元応元年(一三一九)、師が五十五歳の折の寿像として、自らのまたは弟子たちの願いによって造立されたものではないだろうか。弟子側の立場に立って考えると、宗派の最高指導者に転出する師の姿を従前通り身辺に仰ぎつづけたい心情はごく一般的のものであろう。弟子側の願いによって造立されたことの明らかな類例として佐賀高城寺の蔵山順空(円鑑禪師)像の場合がただちに思い浮ぶ。禪師が東

福寺第七世の住持として京へ上ることになった正安二年(一三〇〇)、弟子たちが師の姿を高城寺へ遺すために発願したと考えられるもので、六十九歳の折の寿像である。いずれにせよ、本像の面相にみられる克明にしてリアルな描写は、到底没後の追慕像のよくなし得るところではなく、また像の示す推定年齢も、六十三歳よりは五十五歳の方がよりふさわしいように思えるのである。

筆者は既に刊行された『日本の肖像』(京都国立博物館・昭和四十四年三月)の図版解説(二五一頁)において、本像の名称を「伝安国上人像」と改めて掲載した。膝前の帯の間に書かれた後世の朱漆銘の「□代上人」の難読文字について、「四」とは読みにくく、「五」としか読めないという点から、吞海より十年のちの延元二年(一三三七)に五十九歳で没し、吞海と同じように金光寺から清浄光寺に移り住んだ遊行五世安国上人をこれに当てたわけである。しかしながら、朱漆銘がたとえ「五」であったとしても後世の覚え書きに過ぎず、ましてきわめて読み難い状況にあるのであるから、現段階では、寺伝名称の重味を否定し去るほどの力をもつものとは考えられない。また宮城真福寺の安国上人像との比較も、おおよその骨相に共通するものは感じられても、同一像主と断ずるほどの相似とはいえない。以上のような理由で筆者はこの紙面を藉りて前説を改め、「伝吞海像」としての可能性を復活させたいと思う。不十分な立論で軽率にも像主名を変更したことへの不明をお詫びしたい。

なお、本像および七条金光寺道場については毛利久氏のすぐれた論文があるので参照されたい。<sup>註4</sup>

(井上 正)

〈注〉

- 1 牧野素山「七条金光寺文書——京都・長楽寺蔵——」(『藤沢市史研究』八号・昭和五十一年三月)
- 2 井上正「肖像彫刻の一系列について——僧侶肖像とその脈流——」(『日本の肖像』京都国立博物館・昭和五十三年三月)
- 3 山田泰弘「時宗の肖像彫刻」(『仏教芸術』九五号・昭和四十九年五月)
- 4 毛利久「七条道場金光寺と仏師たち」(『仏教芸術』五九号・昭和四十年十二月)  
毛利久「長楽寺の時宗肖像彫刻」(『仏教芸術』九五号・昭和四十九年五月)